受けたりとは云へ、勁拔の點に於て一歩を進め、その逝る所些か躁氣を伴ふの感なき能はざるも、寫象は流石に正鵠を失はざるものがある。欵に云ふ乾隆丙戌はその三十一年、我が明和三年に當る。卽ち南蘋來朝の年より三十五年を往過してゐる。南蘋の姪としてこの年差あるは當然なるべく、畫風より見て蚤くも壯歲を過ぎたる頃以後の作品とすべきであらう。

飛天像 解說

東京　瀨津伊之助氏藏

像容から察するに略丈六又は二丈程の佛像の光背に付せられた飛天の一であらう。固より光背の一部分に過ぎぬものであるから、獨立して觀察するときは多分に扁平觀を感ずるを免れず、衣褶の如きも決して精刻といふを得ざるも、背部に至るまで刻明に刻出してともかくも全像としての形式を具備してゐることは當時の工匠の仕事の精到なることを物語つてゐるものであらう。今左足を裹む裳の端と、領巾の體に纏る部分以外とを失つて、その缺失部分に拙劣な補修が施されてゐるが、幸に容顏體軀略完好、漆箔は諸處剝落してゐるけれども仄かなる金色を留める個所も多く、豐かな表情を湛へて古致掬すべきものがある。溫雅秀麗な作風より見て藤原時代も末期とは下らざる一秀作と鑑せられる。佛光を鍔るに飛天を以てすることは古代よりこの例必ずしも乏しくはないが、所謂飛天光は、定朝の創始と云ふべからざるも少くも定朝以來その形式の整備と流行と見たことは長秋記長承三年四月十日の條に鳥羽勝光明院造立の準備を記した文中「定朝以來近代吉佛皆作飛天光云々」とあるによつても推知せらるゝであらう。本像は果して何れの寺、何れの佛の光背を鍔つてゐたものであらうか。近時之が世に現れた時は正確なる所傳を失つて鳳凰堂雲中供養佛の一體と傳へられてゐたが、その妄なることは現存雲中供養佛との比較によつて自ら明であつて多言を要しない。但し假令鳳凰堂には非ずとしても他の佛殿楣間に懸列せらるゝ所謂雲中供養佛中の一體かとも考へられないではないが、その遺例の比較的乏しきより、猶飛天光中の一體と認むべきであらう。藤朝後半の造寺造像の盛と、その亡佚の夥しきとを記錄の上に讀むものは、この一小像が、果して何れの寺、何れの佛に附屬してゐたかを穿鑿することの大海に一粟を探るに等しきを嘆くよりも、寧ろこの可憐なる一小像が不思議にも湮滅を免れて、さゝやかながら當時の榮華を物語る好個の記念となりしことを喜ぶであらう。

美術研究所時報

美術懇話會は六月廿四日美術研究所に於て開催、武内金平その他諸氏の蒐藏に係る、古代エヂプト、ギリシヤ、ローマ等の小彫刻工藝品を展觀し、兒島喜久雄氏の講演を聽いた。

寄贈圖書

國史學會　昭和十三年度	筑波研究部
蓬春畫集	山口蓬春氏
博物館陳列品圖鑒　十三輯	朝鮮總督府
海東諸國紀	同
Rowland, Jr. Benjamin; Buddha and the Sun	Rowland, Jr. Benjamin
Pacific Cultures. Department of Fine Arts	國際文化振興會
Catalogue of the Imperial Treasures in the Shōsōin	帝室博物館
Bushsell, Jr David I; Drawings by George Gibbs in the Far	